



第 3 号

1987年 9 月

岡山県古代吉備文化財センター

西江遺跡（哲西町）出土特殊器台文様



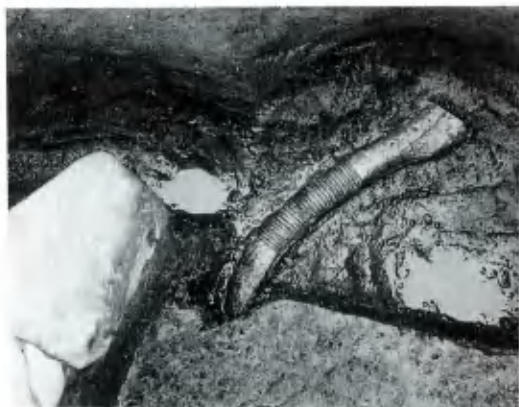
最近の発掘調査から

(弥生・古墳時代の
竪穴住居址の調査)

つしまえどう 津島江道遺跡

江道遺跡はJR岡山駅より北東3.5km、岡山市津島東1丁目1547に位置する。旭川の西岸に開けた沖積平野部であり、南西部1kmに縄文晩期から中世までの遺物遺構を包含する大規模遺

跡で国指定史跡、津島遺跡が存在する。新岡山県青年館建設に伴い、昭和62年3月2日から8月11日まで発掘調査（約900m²）を実施し、竪穴住居址23軒（弥生末～古墳時代前半）、掘立柱建



こくこつ
刻骨の出土状況

物9棟(奈良～平安)、溝16条(古墳後半～中世)、土器溜り3ヶ所(弥生・古墳)、井戸1(古墳前半)、他に土壌(縄文晩期・弥生前期・古墳・中世)、近世畝状遺構、柱穴列、柱穴多数が確認されている。

この遺跡では、竪穴住居址が狭い場所に密集しており、居住域として利用された、安定した微高地であることが判明している。そして、約1/2の竪穴住居址内からは鹿角、骨(鹿・猪・魚・鳥)等が出土しており、なかには、鹿角を利用した刻骨と鹿の肩甲骨を使用したト骨が伴出した住居址、刻骨のみを出土した住居址等が存在する。また、加工されたものがおよそ30点にのぼっており、このような骨角製品の多さは竪穴住居(集団)の持つ特異性を推測することも可能と考えられる。

奈良時代では9棟の掘立柱建物、数条の東西溝が確認されており、倉庫ならびにそれを区画する溝との関係を想定できる。それらには丹塗りの土師器椀、須恵器杯蓋身、碗等が伴って出土している。

これらの遺構・遺物から掘立柱建物群は公的建物をうかがわせ、建物配置ならびに当該地の地域史を考える上で重要な遺構と考えられる。

また、全体を通しての遺物では、縄文後・晩期・弥生前・後期土器片、石鏃、石庖丁、砥石、双孔円板、緑釉、内黒椀、亀山焼鉢、青磁、白磁、染付、土錘、石錘、平瓦、鉄滓等が出土している。
(高畑知功)

つでら 津寺A遺跡

津寺A遺跡は、足守川下流の西岸に張り出した標高55mの丘陵上に位置している。昭和62年4～9月、山陽自動車道の建設に先だち発掘調査を実施し、弥生時代末～古墳時代初頭の墳墓群であることが明らかになった。

1号墳は、この遺跡の最高所に立地する長さ10mの方形墳で、浅い周溝をめぐらしている。墳頂に掘りこまれた墓壇には、長さ1.8mの箱式木棺を納めていた。棺内の北東側には拳大の石を2つ組合せた枕が置かれていたが、副葬品は見つかっていない。

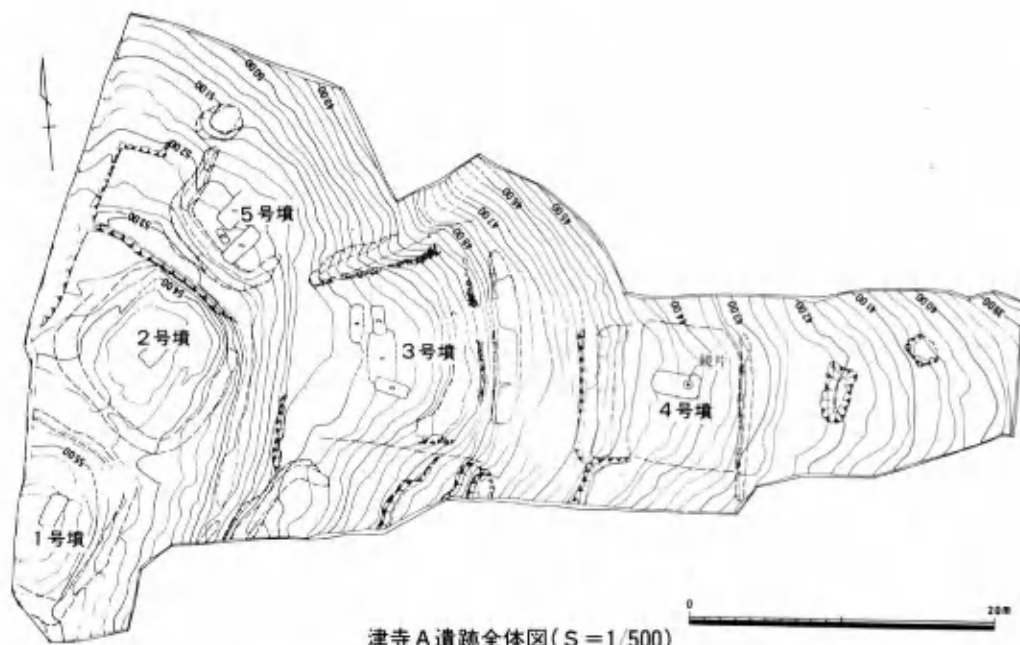
2号墳は、開墾のためかなり変形しているが、長さ10m、幅9mの方形であったものと思われる。墳丘の周囲には溝をめぐらし、墳丘の中ほどには列石が一部残存する。墓壇は、墳丘の中央に掘りこまれており、箱式木棺を納めていたものと思われる。北東側にはやはり石枕があり、南東部分では鉄剣の残片が出土した。1・2号墳の周辺からは、下田所式の土器が出土してお



3号墳 全景

り、その築造時期もこの頃であろう。

3号墳は、長さが10～16m、幅が12mの台形を呈している。墳丘の南北は溝状に掘りこんで区画し、墳丘の中ほどには列石をめぐらす。埋葬主体は5基確認できた。そのうち第1主体は、二段掘りになった大形の墓壇に、長さ1.8mの箱式木棺を納めていた。棺内の北側には3つの石を組合せた枕があり、その周囲に赤色顔料の顕著な散布が認められた。副葬品には鉄剣、鉈、刀子がある。3号墳は、墳丘の周辺から出土し



津寺A遺跡全体図(S=1/500)

た土器から亀川上層期の築造と思われる。

4号墳は、長さ9m、幅7mの方形で、西側に溝を設けて丘陵と切り離している。墳丘の中央に掘りこまれた墓端には、木棺が納められていた。副葬品として鏡片と管玉があり、その出土位置から東に頭位をおいていたことが知られる。鏡片は、復元径14.4cmを測る中国製内行花文鏡の一部である。断面はよく研磨され、二重の櫛歯文をめぐらす外区には一対の穿孔がある。岡山県内で6例見つかっているこの種の鏡の中では最も大きくかつ良質なものであり、出土状況とも相まってその資料的価値は高い。

5号墳は、斜面側を除く三方を溝で区画されており、その規模は長さ7m、幅6mとこの墳墓群の中では最も小さい。埋葬主体は4基検出されたが、それぞれ特異な構造を備えていた。



5号墳 全景

特に第2主体は、墓壇底に舟底状の掘りこみを設け、粘土を厚く敷いて床としている。北東側には石枕が置かれていた。5号墳は、3号墳と同じ亀川上層期の造営と考えられる。

以上のように、津寺A遺跡は弥生時代末～古墳時代初頭にかけて造営された墳墓群であり、その構造や副葬品には注目すべきものが多い。また、この周辺に散在する榑築、鯉喰神社遺跡などの墳丘墓や、足守川河床に広がる集落址との関係は、当時のこの地域の様相を知るうえで重要である。今後の研究に貴重な資料を提供するものとして期待される。(亀山行雄)



4号墳出土鏡片(S=1/2)

やべほりこし
矢部堀越遺跡

本遺跡は倉敷市矢部の西端、ほぼ東西に走る旧山陽道に接し、矢部峠の東に位置する。昭和59年11月に岡山県教育委員会が山陽自動車道建設に伴って事前に実施した確認調査によって新しく発見した弥生中期から中世にかけての集落跡である。調査は岡山県古代吉備文化財センターが昭和62年4月1日から12月31日までの予定で約7,000㎡を対象として全面発掘を行っている。

ここに速報的に紹介する箱式石棺は、棺内の床面に、礫ではなく特殊器台形埴輪片多数を敷きつめて棺床に仕あげるといふ、特異な葬法として注目を集めたものである。3区1号墓と命名したこの石棺は、本遺跡中最も高い、北から南へ伸びる尾根の傾斜変換点、標高29mにある。埋葬施設の構造は普遍的な箱式石棺で長軸はほぼ南北をさすが、おしいことに検出時にはすでに蓋石と側石、小口石の一部が抜き取られていた。内法の計測値は、長さ150cm、幅40cm、高さ20cmである。箱式石棺の床には、特殊器台形埴輪の破片が一面に、部分的には重なり合いながら、敷きつめてあった。敷きつめられた状態は、棺内の南、頭部と思われるあたりに壺形埴輪の口縁部片が文様を下にして敷かれ、棺中央部には器台形埴輪の口縁部がこれまた文様を下にして敷かれ、棺の北辺にも別の特殊器台形埴輪の口縁部が同じく文様を下にして敷かれ、それらの間にも石棺内いっばいに器台形埴輪の胴



遺跡周辺地形図(S=1/3000)

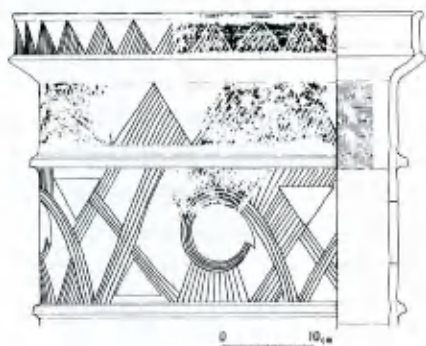
部破片がほとんど隙間なく敷きつめられていた。さらに頭部から中央部にかけては側石に持たせかけるように小破片を立てかけていた。当地方では、特殊器台形土器をそのまま、あるいは二個体分を合せ口にして、二次的な転用棺として再利用した埋葬例はいくつも知られるが、このように、人為的に特殊器台形埴輪を打ちかいて、棺床として利用した例はあまりない。そして敷きつめられた埴輪の上には、頭部から中央部にかけて厚さ約1.5cmに灰色粘土が付着していた。その粘土上に1gに満たぬ少量の赤色顔料が3cm四方に看取できたので、このことが頭



3区1号墓内埴輪出土状況(西から)

位を決定づける有力な手がかりとなった。副葬品は豊富でなく、棺の中央部で長さ10cm・幅0.8cm・厚さ0.1cmの刀子状の鉄器一点を認めたにすぎない。

現在、これら多数の破片の接合作業を進めているが、二個体分の特殊器台形埴輪のうちの一つは、復元直径約45cmで、裾部を欠損しているものの高さ約120cmと推定できる大形のものである。タガは現状で5本、おそらく本来は6本であったと思われる。口縁部には鋸歯文を入れ、普通は無文帯である口縁直下にもやや大振りの鋸歯文および曲線文を刻み、第一段タガの下の文様帯には、右下から左上へ巻きこむ独立した蕨手文を主文様とし、それが一周4単位めぐるようであり、大きくは都月型の範囲に入る。も



3区1号墓出土2号特殊器台形埴輪(S=1/8)

う一つは、上記と同型同大ながら、口縁直下は無文で、文様は蕨手文が一周八単位めぐるようであり、大和・箸墓古墳出土例との関連を今後追求する必要がある。この二個体ともに胎土中に直径5mm以下の赤色砂粒を多数含有している。壺形埴輪は口縁部片で、大きく外反する二重口縁を持ち、外面に大きな鋸歯文が刻まれている。これと同個体と考えられる埴輪片を石棺から数m東下方でも採集している。

さて特殊器台形埴輪の出土例は、岡山県下では浦岡茶白山古墳・都月坂1号墳など七例あり、最近では同じ山陽自動車道用地内の矢部古墳群B42号墳でも出土している。42号墳は、本遺跡の200m南の尾根上にあり本石棺との強い関連が推測できる。(浅倉秀昭)

あし もり がわ や べ みなみむかい

足守川矢部南向遺跡

足守川下流域には肥沃な沖積平野が広がっており、旧河道によって形成された自然堤防上には弥生時代後期の標式遺跡である上東遺跡をはじめ、多くの遺跡が調査あるいは推定されて弥生時代～古墳時代の集落の実態が明らかになりつつある。一方、当平野を見下す丘陵上には弥生時代の墳丘墓ならびに古墳が点在しており、特に、足守川右岸の丘陵上には橋築遺跡をはじめ、鯉喰神社遺跡、烏打雲山遺跡など、弥生時代終末の墳丘墓が所在し、古墳出現を探る上で重要な地域でもある。

足守川矢部南向遺跡は昭和55年、倉敷市矢部地内の足守川河川改修工事に伴って新たに発見された遺跡であり、その後、河川敷内には当遺跡の上流に岡山市加茂B遺跡、同加茂A遺跡の存在が新たに確認され、順次、工事にかかる部分が発掘調査され、現在に至っている。なお、当遺跡は前述の昭和55年に左岸護岸部分が調査され、時を経て、昭和61年度から河床部分を3カ年の予定で調査を実施し、現在も継続中である。

昨年4月に調査を開始して以来、本年9月末までに検出した主な遺構は竪穴住居52軒、土壌150基、溝23本、柱穴群多数などであり、これら遺構出土の遺物から、当遺跡は弥生時代中期～近世初頭にかけての複合遺跡であることが判明しつつある。中でもそのうち竪穴住居50軒、土壌100基以上が弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのものであり、これら遺構群は伴出す



小銅鐸出土住居址

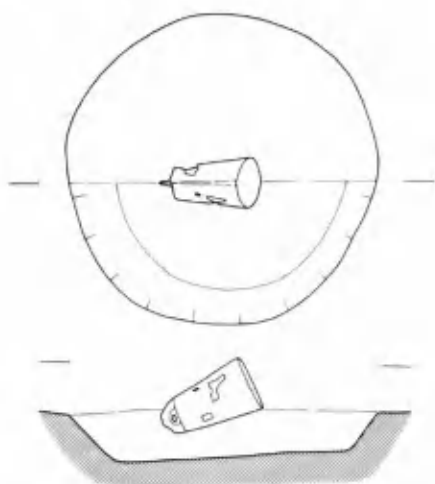
る大量の土器とともに激しく重複し合いながら検出されており、県内の集落遺跡にあって、これほどの遺構密度を示す例は稀である。

一方、当遺跡の特筆する遺物として特殊器台片がある。前年度調査及び今回調査において土器溜り中より出土しており、葬送儀礼に使用されるとする当遺物が何故集落遺跡から出土したのかと注目されるどころである。今回、新たに住居址内より小銅鐸が発見された。全国的にも数少なく、小銅鐸の性格を考える上でも貴重な資料であり、以下、出土状況の説明を加えたい。

小銅鐸が出土した竪穴住居は北半部を護岸工事により既に掘削を受けており、残る南半部においても3軒の竪穴住居に切られ、また、2軒の竪穴住居を切った状況で検出された。推定径約8m、検出面から床面までの深さ約30cmを測る平面形態円形の竪穴住居である。支柱穴は検出された3個の柱穴間隔から8本柱と考えられ、そのうち2個の柱穴からはほぼ完形の壺及び甕が出土しており、出土状況から、明らかに当住居廃棄時に柱抜き取り後埋められたものと判断された。床面には数cmの貼り床が認められ、小銅鐸は貼り床掘り下げ中に鐸身の端部を確認したものである。精査の結果、小銅鐸は住居址南端の壁体溝に近い位置に径約20cm、深さ約6.5cmの小土壇を掘り、図のように、斜め横に置きながらも鈕部を垂直に向けた状態で埋置し、その後貼り床によって丁寧に被覆されたものと考



小銅鐸検出作業



小銅鐸出土土壇平面断面図(S=1/5)

えられる。なお、当住居址の時期は伴出遺物から後期後半(オノ町I式)であり、当住居を切っている住居址遺物もほぼ同様の特徴を示す一方、当住居址が切っている2軒はいずれも後期前半(上東式)の竪穴住居であった。

小銅鐸は総高6.72cm、底部は楕円形を呈し、長辺3.8cm、短辺3.3cmを測る。鈕は断面扁平で、身部には銅鐸特有の鱗はなく無文である。身部は両面とも錆まわりが悪かったためか鑄造時の欠損がみられ、片面のみ長方形の型持孔が明瞭である。

小銅鐸は現在全国で20数例発見されている。その分布は福岡県～栃木県にまで及び、調査で明らかにされている年代観は弥生時代中期～古墳時代初頭にかけてのものである。出土のあり方は墓に係わる祭祀と考えられる例もあるが、主には集落内の住居址、溝から発見される例が多い。中でも今回調査のように住居の床下に意識的に埋置された状態で検出された例はなく、本出土例は家に係わる何らかの儀式ではなかったかと考えている。他に県内例として落合町下市瀬遺跡では井戸周辺から出土している。いずれにせよ、小銅鐸は銅鐸祭祀のようにムラ、あるいはムラムラに係わる祭祀とは考えられず、もう少し狭い範囲(あるいは個人的な立場)で使用されているように理解されており、様々な発見のあり方から、その多様な性格を考えていく必要がある。(江見正己)

普及啓発事業

埋蔵文化財の理解、認識を高め、さらに文化財愛護意識の向上をはかる事業の一環として、第2回「夏休み少年考古教室」を8月20・21日の2日間実施しました。

岡山市吉備津の鯉山小学校文化財保護少年団(5・6年生)36名を対象に、考古学入門、拓本のとり方、土器の復元、火おこし、塩づくり、煮炊き等の体験学習、ならびに発掘調査現場の見学を行いました。

9月初旬に子供達の感想文が届けられました。どの子供の作文にも一生懸命に頑張っている学習した態度がありありとかがえ、初めての体験への不安、行動、驚き、興味、満足のなかにも緊張した気持ちがよく伝わってきました。楽しかったこと、うれしかったこと、おもしろかったこと、むづかしかったこと、ざんねんだったこと、いろいろの「こと」が書かれていました。

なかでも「土器の復元」ではほとんどの子供達が興味を示し、所要時間が不足するほどの熱中ぶりでした。昨年同様に人気学習の一翼を荷なっているようです。

まいぎりによる「火おこし」は炎天下で全員

が汗だくになるまで頑張りました。発火したときの子供達の興奮した目は輝いており、その火でもって作った焼魚、御飯、貝汁、塩等の味は格別だったようです。

また、自転車利用による古墳、集落等の「遺跡の見学」では、暑さと現場に向う登り坂にくじけそうになった子供もいましたが、徐々に気をとりなおして最後まで先生の話を聞いて頑張りました。

それでは、子供達は文化財にどのような思いを馳せていたのだろうか、という点について、5年生の金光陽子さんの感想文の一部を紹介してみます。

いせきを見学しに自転車で行くのはとてもつかれました。山陽自動車道が黒住山36号ふんを通るとい話を聞きました。古ふんがこわされるのは、残念なことだと思いました。でも、大事な物を土から掘りおこしているということを知って安心しました。

日本には、いったいどれぐらいの古ふんや住きよあとや貝づかがあるのかなあと思いました。夏休み少年考古教室に参加して、何千年前の人々の生活の様子や使っていた土器や、かがみや



木器処理室の説明



まいぎりによる火おこし



弥生土器の復元



前池内古墳(黒住山古墳群)の見学

まが玉などが少し理解できたと思いました。
文化財センターの先生方暑いのにいろいろ教えてくれてありがとうございました。

最後に「少年考古教室」の体験を通して、先人の生活を学び、文化財を大切にすることを養うと共に、大人も子供もめまぐるしく時間に追われる生活の中で、見失いそうになる「心のゆとり」を持つ必要性を強く感じました。

展示室利用のまとめ

昭和60年1月28日の開所以来3年目を迎え、この9月30日には8,850人目の利用者をお迎えすることができました。ここ2年間の利用状況がまとまりましたのでお知らせします。

利用状況は年間のうち4・5月と10・11月にピークがあり、反対に冬季は非常に少なくなって

展示室利用者数と平均利用者数

(昭和60年4月から昭和62年3月まで)

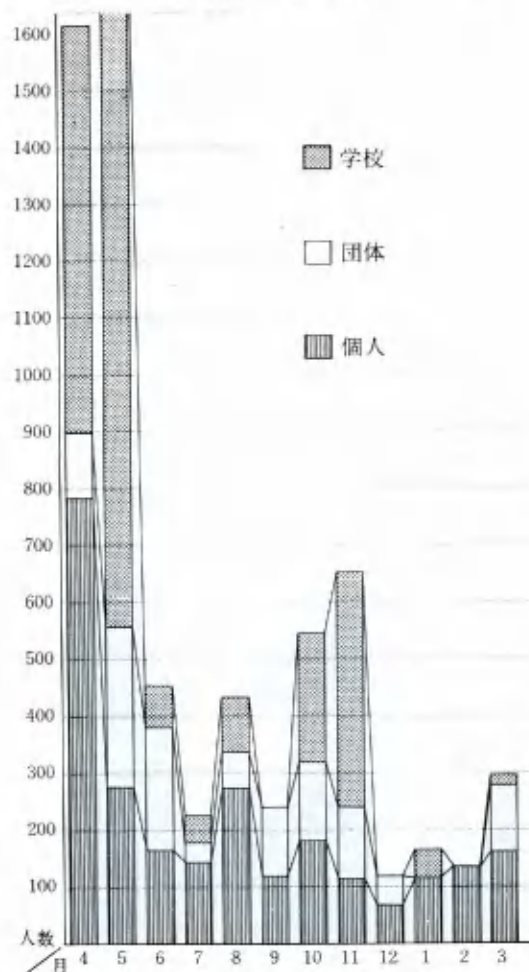
年度	開館日数	利用者総数	月平均利用者数	一日平均	備考
60年度	298	3,721	310	12.48	
61年度	299	3,269	272.4	10.93	
累計	597	6,990	291.2	11.71	

利用者の割合

年度	個人%	団体%	学校%
60年度	46.0	26.6	27.4
61年度	25.5	8.6	65.9
全期間	35.8	17.6	46.6



います。県立自然公園地域内に位置する当センターは、小・中学校等における野外活動の一環として活用される場合が多いようです。今後とも充実した展示室づくりを心がけ、多くの皆さんの来所をおまちしております。



昭和60・61年度展示室利用者数

編集・発行

岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-01
岡山市西花尻1325-3
電話 (0862)93-3211

●交通案内

- ・国鉄山陽本線瀬原駅下車タクシー10分
- ・国鉄吉備線吉備津駅下車徒歩25分
- ・国鉄岡山駅下車岡電バス岡山駅前より神道山行終点下車徒歩5分